

熊本地震から1カ月。被害を受けた僧侶や門信徒は、長期化する避難生活に疲れ、先行きの見えない不安感を募らせている。5月11、12日、被害の大きかった熊本教区益北組の寺院と門信徒宅を訪ねた。

## 益城町・専寿寺

甚大な被害を受けた益城町木山地区にある専寿寺（高千穂義静住職）。本堂、庫裏、納骨堂、鐘楼、すべての建物が倒壊した。本堂と庫裏は屋根が建物を押しつぶしており、道行く人が一瞬足を止めるほど。痛々しい光景が広がる。

高千穂住職（71）は現在、夫妻で鹿児島県の親戚宅に身を寄せ、週に2、3回同寺に戻る。住職の息子である衆徒・智広さん（33）は妻の実家がある熊本市北区に避難し、毎日、車で片道2時間かけて寺に戻る。2人は地震でなくなった門徒の葬儀を行い、依頼のある門徒宅へ月参りを続けている。その合間を縫って片付けを行っているが、あまりにも被害が大きすぎて、ほとんど手つかずと



いった状態である。避難先から一時的に自宅に戻った門徒家族が同寺を訪ねてきた。「お寺が大変なことになっていて聞いたので」と、変わり果てた本堂を前に立ち尽くしていた。

言葉をなくしたその家族に、智広さんは「本堂はこんな状態になってし

まったが、家族5人はおかげさまで、けがをせず無事です。この本堂は明治15年の建立で古かったから。14日の地震で傾き、16日未明の本震で崩れました。本堂建立時の天井画だけはと、重機で屋根瓦を壊したので悲惨な様子に」と寂しそうな笑みを浮かべた（写真右）。

智広さんの案内で、近くに暮らす門徒の田尻高康さん（56）夫妻を訪ねた。その道中、周りの建物はほとんど倒壊している。2階部分がきれいに残り、1階をつぶした家もある。木山地区は門信徒が多く、かろうじて倒壊を免れた家も屋根はブルーシートに覆われる。

田尻さん宅は、築14年の木造2階建ての1階部分が押しつぶされていた。妻の久美子さん（53）は「16日に倒壊してしまいました。14日の地震の後に、必要なものは取り出したつもりだったんだけど。時が経つにつれて家族との思い出の品々が愛おしくなって。今日は親子2代で成人式に着たこれを」と、畳紙に包まれた振り袖を大切にそうに抱えていた。

地区内は、復旧作業やマスコミの関係者も多くの人々が往来し、上空は無人撮影機が頻繁に飛び交う。高康さんは「余震もドローンの音も、取材にも慣れました。でも、避難生活には慣れない。空き巣の被害も心配です」と話す。

田尻さん夫妻は最後に、「先行きは不安だが、命だけは助かりました。いつかまた、ここに小さな家を建てて夫婦で暮らすという希望をもって生きていきたい」と語った。

# 長期化する避難生活に疲れ



## 思い出の品が愛おしい

熊本県益城町・専寿寺門徒の田尻さん夫妻は、1階部分のつぶれた自宅から、思い出の品々を取り出していた